



大きな揺れで目が覚めた。部屋の電気を点けようとスイッチを探したが、なかなかスイッチの場所にたどり着けない。まだ十分に覚醒してはいないためか、真つ暗な部屋の中での自分自身の立ち位置がちんと把握できていなかった。ドアの横のスイッチをやつと見つけ押したが、すでに停電になっていた。自分の寝室のドアを開けると、家内と三女がすでに寝室から出ていたが、揺れはまだ続いていて、階下に降りることは不可能であった。ようやく揺れが止まり、懐中電灯を手にし

複合災害に備えよ

—平成30年北海道胆振東部地震が物語るもの—

情報広報部

橋本 洋一

て階下に降り、浴室の蛇口をひねって、湯船に水を貯め始めた。時計の針は午前3時15分を少し回っていた。

ほどなくして病院から電話が入った。管理職のスタッフ約20人がすでに病院に集まっているとのことだった。停電はしていたが、断水はなく、幸いにも入院患者さんに大きな問題は起きていなかった。

前日の公用のために札幌にいたため、連絡を取り合っただけの36号線を事務長と看護部長の3人で病院に向かった。信号が

停止しているため、スムーズに車は進むことができた。病院に到着するや否や、ミーティングを開いて、要請を受けた全壊、半壊した施設の患者さんや、在宅酸素を必要とする20名弱の入院を、当日中に引き受けることを決定した。停電のためエレベーターは使用できず、さらに患者さんを運ぶ車が送迎の途中で故障するアクシデントに見舞われたが、全職員のチームワークのおかげで難なく収容できた。改めて、チーム医療の重要性を認識させられた。今回の地震は気象庁から《平成30年北海道胆振東部地震》と名

付けられた。北海道と命名されて150年を迎えたが、観測史上、北海道で初めての最大級の地震であった。

今回の地震の震源の深さは約37キロと浅く、地震の規模もマグニチュード6.7で、想定以上の甚大な被害が出たのは、大型台風21号による豪雨の影響と、約9000年前に起きた樽前山の噴火によって堆積した鉄

を多く含む赤い火山灰と白い軽石層の脆弱性という2つの因子が複合したためであり、こういった複合災害は今後、日本全国各地でも起こり得ると専門家は指摘している。

日本とその周辺海域の活断層分布(活断層研究会編「新編日本の活断層」東京大学出版会刊)によると、活断層の数は、密集している伊豆から中部・近畿圏と比較して、北海道

は極めて少ないが、今回の震源地は未知の活断層であった。今後も、未知の活断層を震源地とする地震が頻発する可能性は十二分にあり得る。

今回の地震災害の問題点を整理し、次の災害に備えなければならない。厚真町という一地域の地震が契機になって北海道全体が停電(ブラックアウト)になったが、発電所が苦東厚真発電所に集中していたため、発電所の分散が必要であることは論を待たない。京極水力発電所が稼働し、苦東厚真火力発電所1号機が予定を前倒して再稼働し、石狩湾新港発電所が2019年に完成する予定であるが、北電には未来を見据えた、さらなる安定した安全なエネルギー供給をお願いしたい。電力供給事業者としての北電の不手際を責める声もあるが、45時間という短期間で大半の停電が回復できたのは、北電の並々ならぬ努力の賜物と言える。

25年前に死者172名、行方不明者26名を出した北海道南西沖地震の被災地、奥尻島の震源地に向かって立つ慰霊碑「時空翔」を訪れる機会を得て、私達日本人はいつどこで起きても不思議のない地震国日本に住んでいるという、あまりにも当たり前の事実を心に噛みしめた。

文明の進歩は常に一方通行であり、30年前を生きたといった後戻りはできないことを再認識しないと人類の未来はないということを今回の北海道胆振東部地震は物語っている。